

P2-39.**医療面接実習と OSCE における実習指導教員別の点数の比較検討**

(大学病院・総合診療科)

○原田 芳巳、平山 陽示、和久田佳奈
井村 博美、大滝 純司

【目的】 本学では医学科4年生に共用試験 OSCE の直前に模擬患者参加型医療面接実習を行っている。小グループでの実習で多数の教員が指導している。これまでの検討をもとに、2012年度は指導教員用のマニュアルを作成した(第170回本総会)。利用した指導教員からは、過去の実習指導経験の有無にかかわらず、このマニュアルに対して肯定的な評価が得られた。今回は、学生の出来が実習と OSCE の間でどのように変化するかについて検討した。

【方法】 2012年12月3日～12日に本学4年生129名を対象に実習を行った。全学生が1回ずつ医療面接を行い、その内容を録画した後に2名の研究者が独立して OSCE と同様の評価表により採点した。この点数とその後に行われた共用試験 OSCE での医療面接の点数を比較検討した。また、実習中の指導教員によるフィードバック (FB) を録画から書き起こした。個人別およびグループ別の合計点のほか、点数と FB は「コミュニケーションに関する内容」と「医学的情報に関する内容」に分けても検討した。

【結果】 12グループ96名の学生のデータを解析した。実習・OSCE とともにグループ間で点数に有意な差がみられた。実習と OSCE の間には、グループごとの合計点と「医学的情報に関する内容」の点数で有意な相関がみられた。一方、実習と OSCE の間での個人の点数の偏差値の変化を、グループ間で比較したが、有意な差はみられなかった。

【結論】 実習と OSCE の間での学生の偏差値の変化に関して、指導教員によるばらつきは少なかった。「医学的情報に関する内容」の点数には学生の知識面の能力が反映されるため、実習前の座学によるところが大きいと推測され、今後の実習前の講義に反映させたい。

P2-40.**看護師に対する医療メディエーション研修がストレスおよびストレス反応におよぼす影響—非ランダム化介入研究**

(社会人大学院1年公衆衛生学)

○荒神 裕之
(公衆衛生学)

小田切優子、大谷由美子、高宮 朋子

井上 茂

(全国土木建築国民健康保険組合 総合病院 厚生中央病院 看護部看護教育担当)

西川 英子

【背景】 医療メディエーション (HM) は、患者と医療者のコンフリクト (対立) が生じた際に、第三者であるメディエーター (対話推進者・M) が当事者相互の対話を促進し、情報共有に基づく認知変容により問題解消を支援する仕組みである。M の視点を学ぶことは、対立当事者になった場合の問題対処にも役立つ。看護師はストレスの多い職種であり、HM 概念に基づく研修は、ストレス認知の変容や、ストレス反応の低減に資する可能性がある。そこで、看護師に対して、HM 概念に基づく対話・体験型研修による介入を行い、ストレスおよびストレス反応の変化を検討した。

【方法】 対象者は、都心にある320床の急性期病院の女性看護師とした。介入群は診療科の外来看護師、対照群は健康管理センターの看護師とした。書面で研究参加の同意を得た後、HM研修の前後で職業性ストレス簡易調査票(57項目)及び臨床看護職者の仕事ストレス測定尺度のうち、死との向かい合いに関する4項目を除外した29項目を含む質問紙への回答を求めた。

研修は2回実施し、初回は、実際の対立事案を用いて、当事者の認知齟齬と潜在的な欲求や感情の理解を図り、3か月後に、紛争構造と協働、質問技法などの補充研修を実施した。

分析は、ストレスおよびストレス反応を従属変数、介入の有無を独立変数とした反復測定2元配置分散分析を実施した。研究実施前に、対象病院の倫理委員会の承認を得た(承認番号2013-5)。

【結果】 介入群28名(年齢 44.5 ± 11.7 歳)、対象群7名(42.0 ± 3.1 歳)であった。ストレスおよび